

## 韓国の仮面舞劇と翁猿楽

重田みち

能勢朝次氏以来の能楽研究において、能の起源に関していつも第一に取り上げられてきたのは、奈良時代に唐から移入された散楽である。その一面を受け継いだと推測される平安時代の散楽(「猿楽」とも)の物真似・寸劇の滑稽性は、後の狂言に引き継がれている。しかし一方、能楽の別の大事な要素である仮面とそれに伴う性質は、奈良時代の散楽には見受けられず、少なくとも大きな比重を占めてはいなかったようである。猿楽に仮面が用いられるようになったのは平安時代末期以前であつたと、能勢氏は推測されている。それでは、能楽は(仮面)を、どのような経緯で身に付けたのであろうか。大きな課題であるが、ここではその可能性の一端を提示してみよう。

それは、韓国に伝わる仮面舞劇の古面(現存最古のものは高麗末期頃制作)が、翁猿楽の面と注意すべき共通点を有する事実である。その仮面舞劇は、韓国東部河回洞(ハフヘムチョウ)の祭祀(河回別神クツ)において行われ、使用される約十種の仮面は神聖なものとして大切にされているという。これらの面を日本に初めて紹介されたのは金両基氏(『韓国の仮面』)であり、そのうちの一部の面と翁面との類似性は、中村保雄氏によつてそのあらましが指摘されたことであつたが、本稿はその補強、または今後の考察へと続く序説的なものとさせていただければ幸いである。

まず、翁面(白式尉・黒式尉・父尉・延命冠者)と類似するのは、男性面「両班」(ヤンバン)「ソオンピ」(僧侶)「白丁」(イメ)である。これらの韓国の面の特徴を述べておこう。

- 一、面の形がおおよそ逆三角形であり、上部の輪郭が比較的直線的である。(他の多くの人の面は楕円形あるいは円形である。)
- 一、切顎(吊顎)である。
- 一、割り貫き眼であり、笑う目尻が下がったもの(「両班」)「僧侶」(イメ)と上がったもの(「白丁」)がある。「ソオンピ」だけは黒目だけが割り貫かれ眼全体が吊り上がる。
- 一、額や頬に皺が刻まれる。

これだけの共通点があるからには、海を隔てて向かい合う地域に伝わる両者が、歴史的に無関係とは考えられない。両者共通の祖先に

あたるさらに古い時代の面が、今日伝わらないが、古くは韓半島あたりに存在していたと見るべきであらう。

とくに、右の仮面の特徴については、奈良時代に中国や韓半島の藝能として移入された日本の舞楽面にも似たものがあり参考になる。まず、面の輪郭と切顎及び皺が白式尉と共通する(『採桑老』)であるが、曲は左方楽(唐楽)と伝わるけれども、一書には韓半島に由来する曲であると言う。すなわち「百済国の採桑翁が老いて鳩杖を取る、その屈んだ姿を舞にした」と(『樂家録』)。また『新鳥蘇』や『地久』の面は、顔の輪郭と割り貫き眼が延命冠者と類似するが、両曲ともに韓半島由来とされる右方楽(高麗楽)に属する。したがって、これらの面の造形は、その曲の制作事情が韓半島と縁が深いことを物語るのではないかと考えられよう。

韓半島の文化が、日本のとくに九州北部・山陰・北陸地方に、海流に乗るようになって自然にたどり着くことは、古来珍しいことではなかつたらう。典型例を挙げれば、日本各地の巫女神楽は、韓半島のシャーマニズムが流れてきた後、広がったものと考えられる。たとえば島根県隠岐地方に伝わる巫女神楽は、韓国に伝わる祭祀の巫女舞と同じく、三拍子系のリズムと二拍子系のリズムが交互に現れる独特の囃子を伴う。それと同様のことが、韓国の仮面舞劇と能楽との仮面の類似性に

いても言えるのではなからうか。今日でも、列島の日本海側の海岸には、ハンガルの書かれた生活用品が打ち寄せられてくる。潮の流れは、韓半島東部や南部から東へ、または東南へと線を描くのである。

一方、河回洞の右の男性面と能の翁面との造形における最大の違いは、皺の文様である。中でも、頬全体に、どちらかといえば横方向に彫られる前者と、頬の真ん中を高く残しそれを囲むように円く皺が彫られている後者の違いは、決して小さくない。その相違の理由は、いまは疑問としてそのままに描き、ここでは、韓国のその男性面と日本の翁面との造形に多少の違いが認められるにせよ、両者間の地理的・歴史的な関係の近さはそれを超えているということだけを述べておく。

さて、河回村の仮面で先述した男性面と共通する特徴を持つものに、女性面「ブネ」がある。この面は顔が楕円形であり、皺はないが、割り貫き眼の笑顔である点が、右に述べた男性面と同様である。このブネをめぐって、仮面舞劇では、両班とソオンピとの男性二人がブネを独占しようとする。祭祀におけるこのような藝には、生殖ひいては子孫繁栄を願う意味が込められているものと思われる。

日本においても、鎌倉時代初期までの猿楽の寸劇で仮面を用いたと思われるものの中に、そのような男女を描いたものがあつた。「稻荷社の祭祀で演じられた、老翁と若女の

性的な行いを内容とする猿楽」『明衡往来』や「新妻を迎え本妻を追い出した中納言を描いた猿楽」(米沢本『沙石集』)がそれである。

また、「ブネ」を見て想起されるのは、中尊寺や毛越寺、岐阜の長滝白山神社に伝わる延年の割り貫き眼の女面である。これらは翁猿楽とも関連が深いものであるが、それらを用いた藝能には、たとえば中尊寺の延年のようにその女面を着けた役と男性役とが絡むものがある。また、奥三河の花祭にも、禰宜役、老人役と巫女役による、同様の藝が見られる。これらの藝能は、生殖への願いを包含するという意味でも、韓国の河回別神クツにおける仮面舞劇と、歴史的なかわりがあるのではなからうか。

以上の事柄に注目すれば、翁猿楽やそれに縁の深い仮面を伴った藝能は、その共通の祖先を、古代の韓半島あたりに持つものと推測される。またそれらは、舞楽や散楽のように国家として意図的に日本に移入したものと異なり、基層文化(民俗文化)として自然に日本列島に流れ着いたものである可能性が高からう。

韓国の仮面舞劇と能楽との関係については、このほかにも興味深い事柄や疑問が多く残されているが、これ以上のことは、ここには述べきれない。これを序的なものとして、後の研究に俟つとしたい。

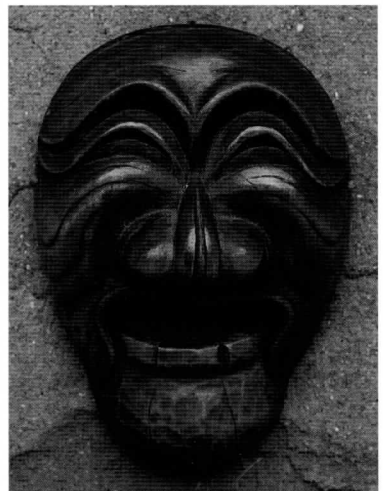
(早稲田大学演劇博物館客員研究員)



ブネ



白丁



両班